

■随想

# 中学卒業記念のサイクリング

高田富美子（高18回）

## クラスのみんなと一緒に

今も変わっていないかもしれないけれど、「団塊の世代」といわれる私たちの頃、公立高校の合格発表は大体、中学の卒業式の翌日と決まっていた。各高校に合格者の名前が掲示され、見に行けない人のためには、早朝、ラジオで氏名が読み上げられることになっていた。

知っている人の名前がラジオから聞こえてくるのが珍しくて、姉や兄の時は頼まれもしないのに早起きして、今か今かと待ったのに、自分の時は聞き逃してしまった。

それよりも、中学の卒業記念に天竜峡へサイクリングすることになったので「絶対行く！」と決めて、そのことで頭がいっぱいだった。試験の結果よりクラスのみんなと一緒にいきたい気持ちのほうが強くて、朝からいそいそとおむすびをにぎり、姉の自転車を無断拝借して、



●たかだ・ふみこ  
昭和22年茅野市豊平生まれ、豊丘村出身。大妻女子大学卒業。カウンセリングの学びを経て、NPO法人コミュニティオン、エンアグラムファシリテーター。心の対話者。現在狭山わかちあい会主宰。

集合時間に間に合わせた。

豊丘から天竜峡までは、起伏の多い石ころだらけの道を十キロ以上行かなければならなくて、普段自転車で乗ることがなかった私には、かなり大変だということがその時はよくわかっていなかった。行けばなんとかなるという変な自信だけはあって、気楽な気持ちで参加した。

集合時間に集まったのは十数名。ひとしきり入試のことが話題になって、思いがけない人が落ちたことなど知らされてショックを受けたが、私がラジオを聞いていないこともみんなを呆れさせた。誰かが「受かってたよ」と教えてくれたので「ああ、良かった」と思ったのを覚えてる。

## 目の前にぽっかりと広がる空間

学校の急勾配の坂を下りるのに早くも緊張し、本当に

大丈夫かな？と不安がよぎった。姉の自転車は体に合っていないくて重いし、サドルの位置も高すぎた。

油断すればたちまち転んでしまうから、必死の形相で後を付いて行つたと思う。前方に小石一つ転がつていてもよけることができず乗り上げて通るし、ペダルを踏むたびにバランスを崩してふらふらする。

車が少ない時代だったので助かつたけれど、我ながら危なっかしい走りで、それを見かねてか、いつも二、三人の級友が後ろにいてくれたのがありがたかつた。

どのくらい走つたのか、岩を削つたようなごつごつした上り坂が続いて景観も変わってきたので、もうそろそろ目的地かなと思つたとたん、急にバランスを崩し、自転車車が右に右にと寄り始めた。気がついたら道の端に端にと、一直線に向かつている。先にはガードレールがなく、目の前にぼつかりと空間が広がっているきりで、「落ちる！」と思つた瞬間、無我夢中でハンドルを引いた左手の力で、かろうじて方向を変え、ことなきをえた。

自転車がカーブした時上体が傾いて、肩越しに小さく見えたのは、はるか下を流れる天竜の青い水面だった。その時はじめて、高い崖の道を走っていることに気がついていた。振り向きざまに見た水面の青さを何十年経つた今も鮮やかに思い出すことができる。落ちなかつたのが不

思議なくらいのきわどいタイミングだった。

「危なかつたなあ！」と後ろの友達が声をかけてくれて、小さく「うん」とうなずいたけれど、もし落ちていたら私は確実に今この世にいない。

全てが一瞬に起こつたことなので、それほど恐しさは感じなかつたけれど、当時の私にも、これは大変なことになるところだったと理解できた。もし落ちていたら、卒業後とはいえ、大好きな担任の先生にどんなに迷惑がかかつたらう、先生が責任を問われることになるかもしれない、と真つ先に頭に浮かんだのはそのことだった。

## 本当に、橋の上から落ちる

担任の古畑先生とは天竜峡で落ち合うことになっていて、もう早くから来て待つていてくれたようだった。私はみんなと一緒に遊ぶ食べ、おしゃべりをして、いつもと変わらず振舞つていたけれど、心の中では迷惑をかけなくて良かった、良かった、とずつと思つていた。前を走つていて気づかなかつたクラスメイトにも話していない。

秘密にしておこうと思つたわけではないけれど、幸い何も起こらなかつたのだから、みんなの楽しい時間を台

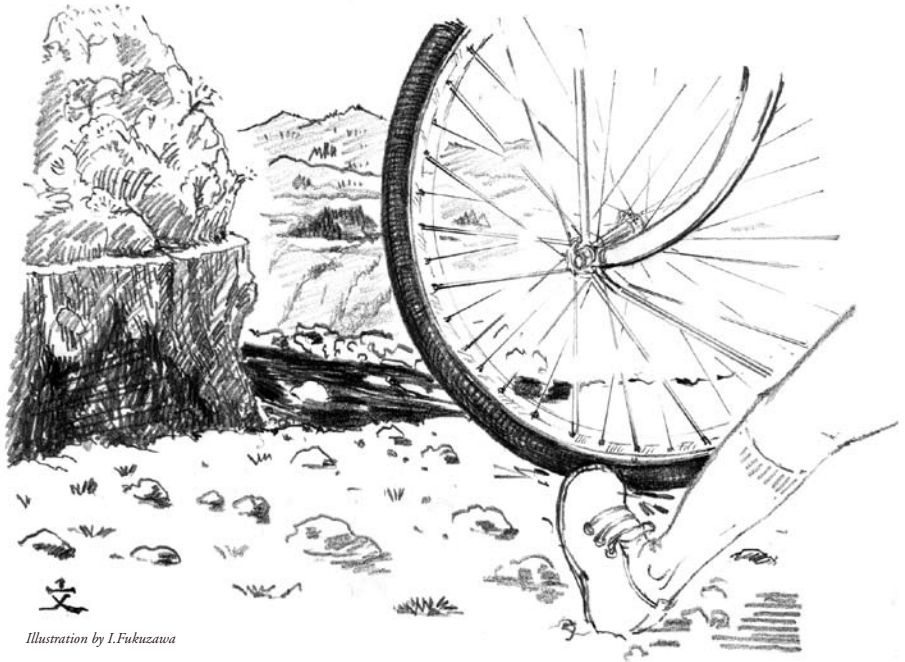


Illustration by I. Fukuzawa

無しにしたらいけないと思って黙っていた。

あの時、私が崖から転落したかもしれない確率はかなり高かったと思う。なぜならそれから一か月ほどして、今度は本当に橋の上から落ちてしまったのだから。

駅から家に帰る途中、板を横に並べただけの木の橋を渡る時、バランスを崩して二、三メートル下の砂地に頭から落ちて、上から自転車がドーンとかぶさってきた。幸い川にはほとんど水がなくて、痛みも全く感じなかったけれど、今度は本当に死んじゃったのかな？と思ったくらいショックは大きかった。死んだら痛みは感じないはずだから。

丁度通りかかった先輩とおぼしき二人の男子高校生があわててとんできて「大丈夫か？」と言いながら自転車を引き上げてくれたけれど、驚きと、あまりの恥ずかしさに、お礼もそこそこに逃げ帰ってきた。

私の運動神経はどうなっているのか、路地から広い道に出た時、自転車が直角に曲がりきれず道を横切って、向うの端で畑に落ちたり、小さな水路にはまってびしょびしょになったり、情けないことや危なかったことはそれからも数多くあった。崖から落ちなかったのは全くの幸運としか思えない。

## 素朴で温かい級友たち

天竜峡からの帰りは竜西側の道を通ることになって、広く平坦で走りやすくなった。ただ車の数は増えてきた。先頭を歩く級友たちは、長い道のりを、分かれ道もいっぱいあったのによく迷わず、先導してくれたと本当に感心してしまう。

帰り道、飯田を抜けて上郷に来た時、一団が急に道を外れたと思ったら、そこは飯田高校の正門前だった。相変わらず列の後を走っていた私は、みんなが自転車を引いて体育館の方に行くので付いて行くと、そこに臨時の掲示板があって、思いがけず私は自分の目で合格を確かめることになった。

わざわざここに立ち寄ってくれたんだとはじめて気づいて驚いている私に、さりげなく笑顔を送ってくれた級友たち。素朴で温かいみんなの気持ち嬉しかった。

## 私たちにとって特別な日

あの一日が悲惨な事故の日にならず、人の温かさに出会えた幸せな一日に終わったことを、今でもありがたく思う。もし私が死んでいたら、親の嘆き、兄弟の悲しみ、友達に負わせた心の傷ははかり知れず、担任の先生ばかりでなく、多くの人に多大な迷惑をかけるころだった。

それにあの日は私たちにとって特別な日だった。

高校に合格したその日の朝に崖から転落死したら、新聞だって普段より一段大きく悲劇的に書きたてるに違いない。本当に何も起こらなくて良かった。みんなに迷惑をかけなくて良かったと繰り返し、繰り返し思ってきた。あの時、天竜の青い水面を見たことで、死というものが案外すぐ近くにあるのだと実感できた。

落ちなくて良かったことには疑問の余地はない。それは確かだけれど、では私にとって「良かったことは何？」と問い始めると、その答えはなかなか難しくくて、若い時は特に「そんなのあるのかな？」と、思うことが多かった。もし、私がこの世に居なくても、世界は何ひとつ変わることもなく動いていくだろう。私って何？と心の問題を考え始めるきっかけになった出来事だった。

結婚して子供が生まれてはじめて「ああ、この世に残すものができて、これが私の良かったこと！」と、明確な答えが見つかって嬉しかった。

「生きているだけでもうけもの」という言葉がある。今になれば全てがもうけもの。生きるのに特別な意味なんていらなかった。二人の子供に恵まれ、平凡でささやかだけれど平和な暮らしがある。

春には初孫が生まれて、もうけものがまた一つ増えた。